

論文の内容の要旨

論文題目 現代アメリカのネイティヴィズム

—「非合法移民問題」の展開と人種・エスニシティ・ネイションの交錯—

氏名 村田 勝幸

世紀をまたいで発表された 20 世紀最後の人口動態分布調査・2000 年センサスは、アメリカにおける人種・エスニック関係の新たな幕開けを告げた。アメリカ史上初めて、全米の人口数で最大の「マイノリティ」集団であり続けていたアフリカ系（人口比 12.3%）が「スパニッシュ／ヒスパニック／ラティノ（Spanish/ Hispanic/ Latino）」（同 12.5%）に抜かれたのである。州・郡・市レベルではすでにみられていた、アフリカ系の数的優位の崩壊が全米規模で起こったことは、アメリカの人種・エスニック関係を特に一般認識において強く規定してきた「白か黒かの二分法」がいよいよ通用しなくなったことを示している。

本論文は、「白か黒かの二分法」のなかに安定的な場を確保することができなかつたラテン・アメリカ系住民を分析対象として、かれらが自らに向けられたネイティヴィズムへの対抗戦略を練りあげる過程でどのようにエスニシティを再構成していったのかという点に注目する。

合法・非合法の移民流入を受けて急速に増え続けるラティノ／チカノ住民への警戒感を基盤とした近年のネイティヴィズムは、しばしばラティノ／チカノ住民全体を「新参者」ないし「外国人」として規定してきた。その際、ラティノ／チカノ住民は「人種化された外国（人）性（racialized foreignness）」を体現する者として、「非アメリカ（人）的」な存在として一括りに表象されることになる。つまり、かれらを標的としたネイティヴィズムは、アメリカ人としてのネイションを立ち上げる際に必要な「他者」を創り出す機能を果たしているのである。そしてこのような他者化を可能にしているのが、ラティノ／

チカノ住民が長いあいだアメリカ社会で築いてきた歴史の周縁化であり、ラティノ／チカノ住民内部の多様性の軽視ないし無視であることは想像に難くない。この「内的に均質で歴史が浅いラティノ／チカノ住民」というイメージが、合法か非合法かという基本的な区分線を事実上帳消しにして、「非合法移民問題」をラティノ／チカノ住民全体に関わる「問題」へと転化していった。こうしたラティノ／チカノ住民全体の問題化は、移民法改編論議が熱を帯び始めた 1970 年代初頭以降、一貫してラティノ／チカノ側を悩ませ続けた。

研究史という観点からみれば、これまでのネイティヴィズム研究は、基本的にナショナリズム研究の一環としてなされてきたといつてよいだろう。第 1 章で言及するアメリカ史家ジョン・ハイアムなどは、多様な価値の統合を理念的な基盤としたうえで、ネイティヴィズムをある種の逸脱として批判的に分析するというスタイルにおいて一貫している。

実のところ、こうした政治思想史的アプローチは、本論文の問題設定と重なる部分であり、同時にそこからテイクオフするという意味で分岐点でもある。やや乱暴に言えば、政治史的なアプローチによるネイティヴィズム分析は、ナショナリズムの波にのまれて他者化されていく者たちの「大きな物語」を主に政治思想史的に描いてきたといえるだろう。これに対して、ある特定の人種・エスニック集団やジェンダーに注目した移民史およびエスニック・スタディーズのモノグラフは、「断片化された実態」を積みあげること地道に抵抗を重ねてきた。1980 年代後半以降しばしば耳にするようになった、アメリカ社会史記述が分析対象を過度に細分化させ、めいめい独自のアプローチをとったため共有可能な議論の基盤を失ってしまったという批判は、典型的には前者から後者へという矢印で展開されてきた。こうした批判に対して後者の側は、「大きな物語」への回帰はやっとの思いで歴史の表舞台へと連れてきた人々や出来事を再度周縁化してしまうと反論してきた。だが、そもそもこのような応酬以外に途はないのか。本論文では、大きな歴史的・社会的文脈につねに注目するという政治思想史的アプローチを積極的にとりながらも、個別実証的なエスニック・スタディーズの側から「大きな物語」を捉え返すという手法をとることで、両者の相互補完的な接合を試みたい。こうした狙いを本論文の「非合法移民問題」分析に適用するならば、具体的には次のようなものになる。政治史的なネイティヴィズム分析は、排斥する側と排斥される側の対抗図式を大状況のなかで明らかにしてきた。だがその一方で、そうした二分法は、排斥する側と排斥される側の双方をそれぞれ一枚岩的に描く傾向があった。「する側」「される側」という区分線の強調が、両集団内部に（あるいは両者を横断するかたちで）存在する人種、エスニシティ、階級、ジェンダー、セクシャリティ、地域性といった差異をしばしば二義的なものとして周縁化してきたのである。主に 1970 年代以降のネイティヴィズムを「非合法移民問題」を中心に分析する本論文では、ラティノ／チカノを「非アメリカ（人）的」と規定する歴史的・社会的状況に注目するとともに、「非合法移民問題」の展開がラティノ／チカノのエスニック・アイデンティティに繰り返し再構成を迫っていくダイナミックな様態をさまざまな角度から分析したい。

アプローチに関わる以上のような課題を踏まえたいうで、本論文の中心的な設問を整理すれば次のようになる。現代アメリカにおけるネイティヴィズムは、それ以前のネイティヴィズムとどこが共通し、

どこが異なっているのか。総じて、どのように歴史化されるのか。1970年代以降のネイティヴィズムの集約ともいえる「非合法移民問題」の形成と展開は、「アメリカ（人）性」をめぐる認識と価値をどう規定し（あるいは規定され）たのか。また「アメリカ（人）性」と人種やエスニシティはどのように連動したのか。

さて、第1章では、1970年代以降のネイティヴィズムの歴史的な性格を、人種主義的なネイティヴィズムが顕在化したもう一つの時期、19-20世紀転換期の状況を分析することで浮かびあがらせる。またここでは、こうした歴史化という作業に加えて、人種とエスニシティという二つの鍵概念を理論的に考察することで、次章以降の実証研究についての理解を理論的な面から補強することを意図している。続く第2章は、1986年移民法制定へと至る移民法改編論議のなかで非合法移民が「社会問題」として規定されていく過程に注目している。その際、移民法改編論議における転換点がどこで、どのような利害がぶつかり合い、そしてどう調停されたのか、といった点が議論の中心となる。

第3章以下の三章の目的は、それまでの二章で行ったネイティヴィズムの歴史化と1986年移民法制定過程に関する包括的な議論を踏まえつつ、「非合法移民問題」という 이슈にエスニック・スタディーズ（ここではラティノ／チカノ研究）の立場から分析を加えることである。とはいえ、そこで展開されているのはオーソドックスなエスニック・スタディーズではなく、政治文化史的な文脈を重視した実証的記述である。先に述べた「通史的記述と個別実証的分析を相互補完的に結びつける」という戦略は、まさにここに関わっている。一般的な歴史記述に多くみられるように、歴史的な流れを古い時代から新しい時代に向かって一本の線で描き、それをまとめた論点毎に時期区分して各章の叙述対象として割り当てるといった体裁をここではとっていない。そうした判断は、第3章から第5章までの中心的な狙いを、特定の組織や個人が「非合法移民問題」の形成と展開のなかで思想や戦略をどう変えたのか、あるいは変えなかったのか、という事柄に強調点を置いたことと密接に関わっている。そのため、この三つの章には、記述対象となった時期や個々の出来事に関してところどころオーバーラップした箇所がある。見方をかえれば、これらの章は特定の組織や個人に関わる三つの通史が絡み合いながらより大きな通史を構成しているといえるのである。

まず第3章では、全米最大のラティノ／チカノ組織である＜統一ラテン・アメリカ系市民連盟（LULAC）＞を分析対象とする。そこで論じられるのは、「非合法移民問題」に関する議論が進展していくなかで穏健派ラティノ／チカノ組織の代表格であった LULAC がどう変わっていったのかという点である。またこの章には、ラティノ／チカノの側から移民法改編論議を捉え返すことで、第2章の議論に架橋するという狙いもある。続く第4章では、非合法移民の権利擁護を目的として立ちあげられたラティノ／チカノ組織、＜自律的社会行動のためのセンター（CASA）＞の思想と活動が分析の対象となる。本格化していく移民法改編論議のなかで、そして「非合法移民問題」に対するラティノ／チカノ組織の向き合い方を決定するうえで、組織としては短命におわった CASA がどのような役割を果たしたのかという問いを軸に議論が展開される。また同時に、同章では人種やエスニシティだけでなく階級が鍵概念となっている。最後に、第5章では、ラティノ／チカノ住民にとって全米レベルのシンボリック

存在であった農業労働運動指導者セサル・チャベスと彼が率いた＜統一農業労働者組合（UFW）＞が「非合法移民問題」をめぐってどのような戦略転換を行ったのかに注目する。この章ではまた、ラティノ／チカノによる人種／エスニック・アイデンティティの再構成の意義を、チカノ史記述の質的な変化を批判的に検討することで明らかにする。UFW の戦略転換とラティノ／チカノ住民全般が持つ人種／エスニック・アイデンティティの変化が緩やかに連動している、というのが同章の基本的な問題設定なのである。